



やまなみ工房

山下完和 | やました まさと

滋賀県甲賀市



けないと思うんです。たとえば施設内にいる関係者が知らず知らずのうちに障がいの困難さやネガティブな話ばかりを伝えたり、近づけないように閉鎖的になつたり、そのことが偏見や差別を作り出してしまってはいいのか。彼らに目的があるなら、それに対して僕はできる限りのことをしたいと思います。いつでも自分のしたいことに取り組めるし、取り組まなくていい。そういう判断が可能な環境にいるからこそ、本当の意味での自立に繋がっているんじゃないかな。それを僕らが、工夫して社会に繋げていく。たとえば彼が落書きのように描いた絵をジャケットにしていただき、それが世界中の素敵なショップで販売され多くの方の手に渡りました。彼はジャケットのデザインをするために絵を描いたわけでも描かされたわけでもないから、無理をしていない。でも彼は素晴らしいアーティストの人として、障がいや福祉というフィルターを

山下：その目的というのは、彼らにとって、自



「いかに個の輝きを放てるか」
取り組みや考えはありますか？

山下：18年間、寝るとき以外ずっとインスタントラーメンの袋を手に持っている女性がいるんですが、それは彼女にとって唯一の表現であり、最も至福な行為なんです。僕らにそれを取り上げる権利はないですよね。ラーメンは彼女にとって、生きるために大事なアイテム。18年でそのラーメンの数は7500個を超えたました。

一番大事なのは、彼らがハッピーになること。日課や作業という僕達が一方的に決めたシステムの中で支援者の理想に近づけるのはなくて、彼らの希望に向うこと。大切なのは目の前の彼らが笑顔で満たされた個の輝きを放つことだと思います。ご家族の願いも大事です。関係者の概念もさまざまです。でも僕らはただ彼らの思いや目的に対し真摯に向き合うだけ。いたってシンプルなんですね。



山下：やまなみ工房は、1986年に3名の利用者とその家族と一緒に、無認可の共同作業所としてスタートしました。僕が関わり始めたのは2年目くらいから。当時、僕はバーテンをしていましたのですが、ある日、知人に忘れた物を届けてほしいと頼まれた先がやまなみ工房だったんです。障がいのある人達が明るく僕を歓迎してくれて、こんなに喜ばれるのつはじめてだったので、モテるつて錯覚をしてしまって。僕自身が「この人達と毎日過ごしたい」と思って、居座ったのがきっかけです。就職したのはそれから半年後でした。でも、はじめは彼らを社会に適応させなくてはいけないと一方的に思つて、一人ひとりの本音と向き合えていませんでした。

2年くらいしたときでしたかね。重度の自閉症の方が内職する手を止め、楽しそうに絵を描いていました。僕は彼のあんな笑顔を見たのははじめてでした。そして思つたんです。彼は今、自分の人生を楽しんでいるのだろうか。やまなみ工房での仕事は、彼にとって何なんだろう。内職以外にも、たとえ対価に結びつかなくても彼には彼の生き方があるのではないか。そう考えて、彼が他律的な環境から開放され、自律的に自分自身を表現することが

「スタッフのスタンス」

山下：楽しいことを彼らに紹介することも僕達の役割の一つなんです。海に連れて行ったり、信楽焼の工房に立ち寄って粘土を触つてみたり、そういう日常生活がいつの間にかそれぞれの表現に繋がっていくだけなんです。施設にアートを取り入れるとかアート化することではなく、ただ一度しかない人生を様々な経験をする中で心豊かに過ごしたい。

彼らにとっての障がい、そして制限や制約が福祉施設の中にいる僕達職員になってはいません。彼らがもっと幸せになるため、新たな取り組みや考えはありますか？

山下：表現とはそもそも自分の世界を築くこと。彼らには一途で強い目的がある。僕らが偏った概念に照らして彼らと向き合い、多様で個性的な彼らの素晴らしい部分を変えようとしてしまっているようではダメですよね。

山下：表現とはそもそも自分の世界を築くこと。彼らには一途で強い目的がある。僕らが偏った概念に照らして彼らと向き合い、多様で個性的な彼らの素晴らしい部分を変えようとしてしまっているようではダメですよね。彼らがもっと幸せになるため、新たな

できる時間と空間を作りたいと思つたんです。



A black and white photograph of a man with dark hair and a mustache, wearing a dark coat with a large, voluminous fur collar and a dark hat. He is looking slightly downwards and to his right. The background is a textured, light-colored wall.

PR-yとはPR(広報活動)とpr(こじ開ける)という言葉を合わせた造語。

環境を整える

山下：10年間、ほぼ毎日のようにパニックを起こしていた男性がいました。どうしたら穏やかに過ごせるだろうと試行錯誤の末に一人っきりの部屋で、大音量でお気に入りの唄を聴きながら寝転んで絵を描く、落ち着いてパニックが起らなくなり快適に過ごせるようになつたんです。僕は10年間も、彼のルールとスタイルに気づけなかつたんです。僕らのすべきことは彼らが穏やかに過ごせるよう、一人ひとりの価値観に応じた物的環境と、人的環境を整えることです。

山田：100人いれば100通り、違うんですね。

山下：障がい者とか利用者とか、一括りにしてしまうと彼らの個の思いが見えなくなってしまう。彼らの内からなる真の思いが真っ直ぐ

A person wearing a dark blue long-sleeved shirt is seen from behind, sitting at a table and painting on a large sheet of white paper. The paper is covered in colorful, abstract brushstrokes in red, green, yellow, and black. The person is holding a paintbrush in their right hand. In the background, there is a wooden cabinet and a window with a white frame. The scene is well-lit, suggesting it is daytime.



ぐ伝わり輝きを放てるかという工夫を大事にしたいと思いました。一つの部屋で、与えられたことを5年先も10年先も毎日しているような人生にしたくはない。これからもこんなことしたら、あんな場所に行つたら、こんなものが目の前にあつたらみんな喜ぶかな、驚くかなって。毎日ワクワクするようなことをしたいです。

彼は自ら幸せだと言葉で伝えてはくれませ
ん。でも、僕は彼らの表現や、そして彼ら自
身の「特別な思い」を大事にできる人であり
たいと思っています。同時に僕が尊敬する彼
らのことを一人でもたくさんの人々に知っても
らいたい。具体的には言えませんが、そのこ
とにより社会が必ずいい方向に変わる気がし
ます。彼らにはその力と魅力が誰よりもあり
ますから。

山下：自分らしく生きること、楽しく生きること、人として大切なことを教わっているのは僕達の方です。これからも彼らが彼らであるためにそれぞれの苦痛を最大限取り除きハッピーを感じる毎になればと思います。みんなが健康で笑顔でいると周りも心が穏やかになります。やまなみ工房の人達が、誇りを持つて樂しく素敵に活動していることを伝えたいですね

これから目指す未来

山出：これからどういう未来を目指しますか？
山下：僕自身には何の力もないし、社会を変えるみたいな大層なことは思っていません。僕らの目指すことは一つです。

